

年頭にあたって

ご挨拶



富山薬窓会会員みなさま、新年を迎えるにあたりますますご健勝、ご活躍のことと推察申し上げます。また、昨年は総会等で各支部を訪問させていただいた折に多くの方々から、今後の富山薬窓会のあり方について格別なる激励を賜りました。この誌面を借りまして改めて深く御礼申し上げます。

昨年は細谷健一教授から酒井秀紀教授（第72回生）へ薬学部長職が引き継がれました。薬学部長として長年にわたり薬学部発展のため多大なる貢献をいただいた細谷教授に本会を代表しまして深く感謝いたします。さて、酒井新学部長は学術的業績のすばらしさはもちろんながら、その誠実かつ人間味あふれる人柄で会員の皆さんのなかにもファンが多いのではないのでしょうか。高校、薬学部、大学院を通じてわたしの同期である彼も細谷前学部長に引けを取らず、薬学部発展はもとより富山薬窓会のためにも大きな力添えをしていただけるものと期待しております。もうひとつお知らせがあります。うれしいお知らせです。テイカ製薬代表取締役社長で富山薬窓会前会

富山薬窓会 会長 稲田 裕彦

長の松井竹史氏（第50回生）が旭日双光章を受章されたこととあります。これは長年の薬剤師会への貢献、薬事関係の様々な功績が認められたものです。2年前の本誌94号にて同氏の厚生労働大臣表彰の受章をお知らせしたばかりなだけに大先輩の重ねての受章を大変誇りに思います。

遠久栄にて年頭のご挨拶をさせていただくのもこれで4回目になります。ほぼ3年あまり、会員の相互交流と薬学部の発展のためにまず富山薬窓会本部組織の改革、活動の基盤となる会費収入確保等を目指しておりましたが、まだまだ道半ばであります。わが身の不徳のいたすところですが、それでも拙速になることなく、会員の皆様のご意見に耳を傾けながら富山薬窓会の運営にあたっていきたいと考えております。本年も各支部総会、活動等に参加し、ご指導、ご鞭撻を賜りたいと考えておりますので何卒よろしく申し上げます。

平成最後の遠久栄となります。新年、新しい年号となりましても会員の皆さんはもちろん、ご家族の方々も含めましてご健勝に過ごされることを祈念して年頭のご挨拶させていただきます。



伝統から未来へ



新しい年を迎え、富山薬窓会会員の皆様には、ますますご健勝とご活躍のこととお慶び申し上げます。皆様には、日頃より、薬窓会の運営、ならびに薬学部の教育研究に対し、格段のご配慮とご支援を賜っており、改めて厚く御礼を申し上げます。

私は、昨年4月より薬学部長、大学院医学薬学研究部長を務めております酒井と申します。富山薬窓会第72回生です。薬学部4年次生から博士課程修了時まで、製剤学研究室・薬物生理学研究室（竹口紀晃教授）に所属しており、竹口先生には公私にわたりお世話になりました。私は、2005年から薬物生理学研究室を担当しています。当時の竹口教授室にあった大きなゴムの木は、現在、挿し木した多くの苗として生き続けています。

富山大学 薬学部長 酒井 秀紀

このたび、薬学部長として、母校のために恩返しをする機会を与えていただいたことに、身の引き締まる思いです。富山薬窓会の皆様が脈々と築いてこられた薬学部の伝統を大切にしながら、現在直面するさまざまな困難な課題に、全身全霊をかけて取り組んでまいりたいと思います。今後とも皆様のご指導ならびにご支援をよろしくお願い申し上げます。幸い、薬窓会首都圏支部の柿崎前支部長（第55回生、故人）、中西支部長（第60回生）、近畿支部の渡辺前支部長（第59回生）、安居支部長（第76回生）、九州支部の三松支部長（第54回生）、富山・石川合同支部の石黒前支部長（第50回生）、寺西支部長（第63回生）には、これまでに何度も支部総会開催の際にお声がけをいただいています。このような各支部長様の温かいご配慮により、毎年、多くの薬窓会の皆様方との意見交換の機会がありますことを、大変に嬉しく、有難く思っております。

また、富山薬窓会の元会長の田村四郎氏（第39回生、故人）が設立された田村科学技術振興財団（理事長：田村良枝氏、専務理事：日医工株式会社・田村友一社長）の全面的なご支援により、本学薬学部において「薬学経済特別講義」が、2006年より毎年開講されています。この講義は、富山薬窓会会員としては、初めて東証一部上場企業の社長を務められた飯田晋一郎氏（第48回生）のご尽力により立ち上がり、全15コマの講義のうちの多くは、各方面でご活躍の薬窓会会員に担当していただいています。ちなみに昨年の初回の講義は、富山薬窓会会長の稲田裕彦氏（救急薬品工業株式会社社長、第72回生）が務められ、マスコミにも取り上げられました。さらに、富山薬窓会元会長の松井竹史氏（第50回生）が社長を務められているテイカ製薬株式会社様には、毎年、入学間もない創薬科学科1年次生の早期体験実習をお引き受けいただいております。学生たちが極めて貴重な体験をしています。諸先輩方の、本学薬学部生に対する温かいご配慮、ご支援に感謝の気持ちで一杯です。

私は、学部長在任中に、薬窓会の皆様のご理解とご支援をいただきながら、ぜひ実現につなげたいことがございます。それは、「薬用植物」をキーワードとした取り組みです。富山大学薬学部附属植物園の歴史は、1923年に富山薬学専門学校薬草園が神通川廃川地に設置されたことに始まり、1977年に現在の杉谷キャンパスに薬用植物

園が移設されました。2023年には、記念すべき「薬用植物園設置100周年」を迎えることになります。しかし、現在の植物園は、灌水・温室設備の老朽化、植栽樹木・植物のディスプレイ性の低下、既存研究棟・管理棟の不十分な機能性など、問題が山積しています。私はぜひ、薬用植物園を「くすりの富山」におけるシンボリック的存在にするために、視覚的かつ機能的に充実した植物園の再整備を目指したいと考えています。

薬用植物園がリニューアルされれば、教育面への効果として、標本見本園の展示性向上、学修環境の改善、全天候型環境での実習実施、東西融合型医療に関する実践的知識・技術の提供向上などが期待できます。研究面への効果としては、新規薬用植物の作出の効率化、薬用植物の種苗の安定供給体制確立、保存植物のゲノム解析を基盤とする医薬品開発研究の強化などが期待できます。また、整備された薬用植物園を広く一般に公開することで、「くすりの富山」に根差す富山大学薬学部の存在感を、より一層高めることにつながると思います。

今後とも、富山薬窓会の皆様には、いろいろお世話になります。引き続きのご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

末筆になりますが、皆様のご健康とご多幸をご祈念申し上げます。

ご挨拶



薬窓会会員の皆様には、ご清祥ご活躍のこととお慶び申し上げます。皆様が創り、積み上げてこられた薬学部・和漢医薬学総合研究所の伝統・業績に敬意を表するとともに、本学の活動・運営に多大なるご支援ご協力を頂いていることに感謝申し上げます。さて私

儀、8年間勤めさせていただいた学長職を、本年3月で終えることになりました。1979年10月に、開院直後の富山医科薬科大学附属病院に着任して以来ほぼ40年、薬窓会の多くの皆様方に大変お世話になってまいりました。本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

時代は大きく変化しています。科学・情報技術の急激な進歩・普及は、「創薬・薬業」分野の研究・産業活動においても、10年前には想像できなかったスピードと拡がりによって成果・発展を生み出しています。一方で世界の社会・経済情勢は混沌の度合いを深め、特に少子化に直面するわ

富山大学 学長 遠藤 俊 郎

が国では、教育改革が正解の見えない大きな問題となっています。国立大学においても、国家の厳しい財務・政策状況を反映し、組織・財務・運営の改革、教職員の業績・評価の向上・具現化など、改革強化に向けた指示・施策は年々厳しさを増しています。

厳しい時代だからこそ、大学・大学人は現状に安んぜず、自己の持つ強みを発揮し、将来に向け挑戦を続けることが責務と考えます。本学では2018年4月、「都市デザイン学部」の開設、教養教育の五福キャンパスでの一元化を実現することができました。3大学再編統合が目指した「1法人1大学」の具現化であり、富山大学が真の大学改革に向け新たな扉を開いた証となりました。その後も全学の組織・運営体制について抜本的改革を進め、教育・研究・社会連携など各分野での活動強化に努めております。10月には、内閣府所管の地方大学・地方産業創生交付金対象事業において、県内薬業界の発展と産学官連携強化を目指す申請「『くすりのシリコンバレー TOYAMA』創造計画」が採択され、本学にとって大き

な励みとなりました。

多くの国立大学にとって、今後の4年から10年は各大学の存亡をかけた、競い合いの日々となることでしょう。現時点で、富山大学の将来像を明確に描くことはできません。だからこそ、歴史と伝統を育んできた薬学・和漢関係の皆様への活躍にかかる期待は、一段と大きなものとなっています。なお、和漢医薬学総合研究所については、近年社会的に極めて厳しい評価を受けていることより、改

めてその再生を本学の最重要課題と位置づけ、大胆な組織改組を含む大型改革を企図・推進中です。

教職員の皆様、国立大学を取り巻く厳しい状況をご理解の上、新たな大学改革の取組みを直視し、今後ともより高みを目指しご奮闘ください。同門会の皆様には、引き続き積極的なご意見ご支援を賜りますようお願いいたします。

皆様の益々のご健勝ご活躍を祈念いたします。

ご挨拶



新春を迎え、富山薬窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝ご活躍のこととお慶び申し上げます。

昨年10月、本学と大学間交流協定を締結している中国・中日友好病院において日中友好条約締結40周年を記念した医学交流フォーラムが開催されました。研究所からは生薬資源科学分野の小松かつ子教授と私がこのフォーラムに招聘され、和漢薬に関する研究発表と学術交流に関する議論を行ってきました。私が研究所前身の旧・富山医科薬科大学和漢薬研究所に着任した1988年当時、中日友好病院から数名の留学生が研究所におられたことを覚えております。それから30余年を経て

参加したこのフォーラムにおいて本学・研究所の諸先輩方のご尽力に改めて感銘した点が二つあります。一つは人材育成で、研究所をはじめ、本学に短期・長期留学された方々が、今日、中国の医療・学術機関で重要な職責を担い、医療、教育、研究をリードされていることです。もう一つは、30年以上経過して相互に世代交代した今日においても本学との学術交流や研究者交流を通じて相互発展を強く希求されていることです。このように本学・研究所に向けられた感謝の心と敬意の念は、ひとえに当時の諸先輩方のご尽力の賜であり、それを礎として今日の研究所があることを再認識致しました。

研究所は2004年に組織改変し、和漢医薬学総合研究所となりました。この15年の間、我が国では急速に少子高齢化が進み、社会経済も激変しました。それにより大学を取り巻く環境も大学人に期待される役割も大きく変わってきました。当然ながら研究所にも、和漢薬の学理を追求する基礎

和漢医薬学総合研究所 所長 松本 欣三

研究から、より臨床に直結する応用研究、地域産業の振興にも貢献する連携研究、さらには国際研究拠点の形成を目指した共同研究と国際的人材育成への転換が求められています。その社会的要望に応えるべく、私たちはまる一年かけて学内外の研究者、有識者との議論を重ね、和漢薬に関する研究機能の強化、次世代に向けて担うべき研究領域、さらには国内外の研究機関との連携強化戦略等の見直しを行ってきました。本年はこれまでの議論の結果を正に具現化し、さらに本学の特色・強みとしていく新たな出発年となります。研究所は、本学の諸先輩方が中国をはじめ、国内外に構築されてきた学術交流や人材ネットワークの活用を図りつつ、新たな研究所組織として次世代の和漢医薬研究の推進とそれを担う人材の育成に尽力する所存です。

薬窓会ならびに関係各位の皆様には、引き続き暖かいご支援ご鞭撻を賜りますよう宜しく願い申し上げます。

